

【シンポジウム】

～理想と現実のあいだで～ <ヌサンタラ>多島海の地に夢を追う

～Between Idealism and Realism～

Dreaming dreams and trying to make them come true in Nusantara

趣旨説明

Background of the Symposium

加藤 剛（京都大学 ・ 名誉教授

KATO Tsuyoshi (Kyoto University, Professor Emeritus)

【時間節約のためシンポジウムでは口頭の趣旨説明は行いませんのでご承知おき下さい】

カパルはそのビジョンにおいて、「インドネシアと関わりを持つ人のための開かれた研究・交流・情報プラットフォームの創出」を謳っています。研究者に限定されることのない交流と交歓の場の創出を目標としているからです。今年12月18日－19日のカパル第3回研究大会は、昨年12月の「再編」第2回研究大会に続いて、それもシンポジウムの企画立案が始まる前の5月にオンライン開催にすることを決定しました。それだけ新型コロナウイルスの感染状況の悪化が懸念されたからです。

オンライン開催を好機として、というのは語弊がありますが、今回のシンポジウムでは、普段であれば業務でお忙しいだろうと遠慮し、対面開催の研究大会にインドネシアを含む遠方からお呼びするのがためられる方々、とくにインドネシアにおいて実務・実践に従事されている方々にオンラインで参加していただき、それぞれ異なる分野——人間交流と相互啓発・相互理解、カカオ生産とチョコレート製造販売、森林保全と森林利用——における活動経験を基に、お話をしていただくことにしました。コメンテーターは、「トアラコトラジャ」で有名なキーコーヒーの現場生産責任者の方です。

新型コロナ禍の閉塞状況にある現在、観念的なテーマではなく、「ヌサンタラに夢を追う」具体的な実践活動に関わる話をお聞きし、フィールドの人々の現状と将来に思いを馳せつつ、今後インドネシアとどのように関わっていくかについて、わたしたちみんなにとって新たに考える切っ掛けになればと思います。ただし登壇者の方々にお願いしたのは、美しい「成功物語」ではありません。前置きに「～理想と現実のあいだで～」と入れたのは、夢といえども常に理想と現実のあいだで追及されるものだからです。お説拝聴ではなく、視聴者を含む参加者全員で理想の形とはなにか、理想に少しでも近づく途はいかなるものかについて意見交換をできる場になればと思います。

島上宗子（愛媛大学／一般社団法人あいあいネット）

Shimagami Motoko (Ehime University/i i network)

愛媛・香川・高知大学とインドネシアのガジャマダ・ボゴール農科・ハサヌディン大学は、2013 年より連携して農村貢献型実習プログラム（SUIJI サービスラーニング・プログラム、以下 SUIJI）を実施している。文部科学省の補助事業（大学の世界展開力強化事業 2012～16 年度）として開始し、補助期間終了後も、各大学が財源を確保する形で継続実施している（コロナ禍により 2020、21 年度は実質休止、一部オンライン化）。報告者は、SUIJI の立ち上げから現在までその実施に携わってきた。

事業の柱は、6 つの大学の学生が四国の農山漁村で夏に 3 週間、インドネシアの農山漁村で春に 3 週間、共に滞在して地域の課題解決を目指した活動に取り組みながら学ぶ農村実習である。インドネシアで長い歴史を持つ農村長期実習（KKN）等の実績に依拠しつつ、一部カリキュラムを連動させて実施している。

報告では、プログラムの実施経験から見てきた「理想と現実」とその動態についてお話ししたい。具体的には、6 大学間の同床異夢的「理想」、参加学生の戸惑い・悩み・変化、教員の立ち位置と役割、などである。いずれも現在進行形で模索している検討課題であり、プログラムのよりよいあり方について、シンポジウムでの議論を通してヒントやアイディアを得たい。

時間が許せば、コロナ禍により実施したオンラインの取組から見てきた課題と可能性、現在検討中のウィズ・コロナ時代の農村貢献型実習のあり方についても触れたい。

【参考資料】

●「異文化交流を通じた地域未来づくり：日本・インドネシア協働サービスラーニングの試み（前編）（後編）」

↑「カバル・アンギン（風のたより）」掲載予定【カバル第 3 回研究大会シンポジウム関連企画 1】

↓下の Youtube をご覧になる前に上のエッセイを先にお読みください。

●2019 年参加学生作成動画（インドネシア訪問と日本訪問）：

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLhBwZAFY-J62fTc094qQUrQx49d29VFQN>

吉野慶一 (Dari K 株式会社)

Yoshino Keiichi (Dari K Co., Ltd.)

世界中で多くの人に愛されているチョコレート。しかし、そのサプライチェーンの上流には、原料カカオ生産者の窮状や児童労働、気候変動など様々な課題があります。2011 年に設立された Dari K は、そのようなチョコレート業界に潜む課題を解決することを目的としたミッション・ドリブンの会社、社会的使命を重視する会社です。

本発表では、報告者が金融アナリストからチョコレートのベンチャーを立ち上げるに至った経緯から、過去 10 年間の活動の軌跡、そして今まさに挑戦していることについてお話しいたします。具体的なトピックとしては、

- ・なぜインドネシアのカカオに着目したのか？
- ・インドネシアのカカオ生産者が抱える問題とは何か？
- ・一般的なフェアトレードと Dari K のアプローチの違いは何か？
- ・Dari K が考える気候変動への適応策
- ・生産者の意識を変えた想定外の出来事、などです。

10 年間の経営を通して直面した葛藤や挑戦についても率直にお話ししたいと思います。

【参考資料】

- 「理想と現実の Gap を埋める：インドネシアのカカオ農家支援の現場で考えたこと」
↑「カバル・アンギン（風のたより）」掲載予定【カバル第 3 回研究大会シンポジウム関連企画 2】

- 「Dari K の取り組みは反フェアトレード!？」ブログ『日々雑感』2015 年 5 月 25 日
https://www.dari-k.com/blog_post/dari-k%E3%81%AE%E5%8F%96%E3%82%8A%E7%B5%84%E3%81%BF%E3%81%AF%E5%8F%8D%E3%83%95%E3%82%A7%E3%82%A2%E3%83%88%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%89/

社会的使命を重視し海外で活動している Dari K は、しばしばフェアトレード推進派だと思われています。そうではないこと、どうしてそうではないかを説明しています。

熱帯泥炭地の保全と植林事業の調和は可能なのか
——理想の模索と理想の実現に向けた 12 年間の挑戦の軌跡——

How to Harmonize the Conservation of Tropical Peatland and Commercial Afforestation:
A Trajectory of Twelve Challenging Years
in Search of Ideal Solutions in West Kalimantan

加藤 剛 (PT. Wana Subur Lestari 他 2 社)
Kato Tsuyoshi (PT. Wana Subur Lestari & 2 other associated companies)

熱帯泥炭地で植林事業を行うか否か——十数年前、報告者が勤務する住友林業社内で大論争となった。西カリマンタンにある広大な泥炭地の開発権を取得するかを議論していたときである。熱帯泥炭地は大量の水とカーボンを貯め込んでいる。従来の植林開発は「排水型」で、泥炭地に水路を掘って水抜きをし、地下水が沈下して落ち着くのを待つ。それから植林木の植え付けである。問題のひとつは、新たに生まれた土地は、分解していない腐った樹木の植物遺骸、それも乾燥した遺骸から成ることだ。そのために大火災が発生しやすい。熱帯泥炭地の開発が批判される所以であり、十数年前、社内で大論争となった理由でもあった。失敗するリスク、NGO などの批判に晒されるリスクが大き過ぎるからだ。

しかし、事前調査をした当時の現場では、川を丸太が埋めつくほどの違法伐採が横行し、伐るモノがなくなれば次々と森林に火入れが行われていた。事業候補地のほぼ中心に手つかずの泥炭湿地林があった。その森に火入れが迫ったとき、黙って放置するのは無責任だと気づかされた。企業として守るべきところは責任を持って守る、そして利用するところでは経済性を求めていくべきだ、と。泥炭地である限り、たとえ乱開発された跡地でもその後の人為的介入は一切排除すべし、という人たちがいる。手つかずの森の新規開発には私も反対だ。しかし乱開発跡地を何とかしなければ、手つかずの森もやがて失われていくことになる。では何をすべきか。住友林業と現地企業との合弁会社の経営責任者として、これを問い続けた十数年間だった。幸いにして、現在の取り組みについては国際環境 NGO の理解と支持を得ることができた。報告では、一体何をどうしたのかについてお話ししたい。

【参考資料】

●「泥炭地を守り、森林を守り、そして希少動物を守る：WSL 社の西カリマンタンにおける植林事業の取り組み（前編）（後編）」

↑「カバル・アンギン（風のたより）」掲載予定【カバル第 3 回研究大会シンポジウム関連企画 3】

コメント

Comment

藤井宏和 (PT.トアルコ ジャヤ)

Fujii Hirokazu (PT. Toarco Jaya)

PT.トアルコ ジャヤ (1976 年設立) は、南スラウェシのトラジャでコーヒー農園を営んでいます。トラジャ地域は標高が高く、高品質なコーヒー生産に適した土地ではありますが、トアルコ ジャヤ社設立当時は、国際コーヒー市場で通用する品質ではありませんでした。そこでわたしたちは、インドネシアコーヒー産業全体の品質向上の牽引役となること、あわせてトラジャの地域経済の発展に貢献しながら、良質で安定した原料コーヒーを確保することを目標に事業を開始しました。

開始当時は、近隣の生産者からコーヒーを買い集める事業に加え、530ha のパダマラン農園の開墾を行いました。農園開墾とコーヒー栽培を実現するために、農園周辺の道路建設を行い、開墾・栽培・収穫のための作業員を地元民から雇うことで雇用を創出してきました。また、高品質なコーヒーの生産方法を農園で体現することで、高品質なコーヒー生産をトラジャ地域に伝播させるという目的を果たしてきました。

近年、気候変動や都市部への働き手の流出などの自然環境・社会環境の変化により、トラジャコーヒーの持続的な生産にも課題が生じています。このような状況の中、現在の課題に対応した事業活動に変化していく必要が出てきており、新しい取り組みを始めています。

わたし自身は、生産担当取締役として2018年3月よりトラジャに駐在しています。シンポジウムでは、45 年に及ぶわたしたちのトラジャでの経験、そしてわたし自身の現場での体験を踏まえて、報告者の方たちのお話にコメントをしたいと思います。

【参考資料】

- 「コーヒーの生産地に行ってわかった“サステナビリティ”の本当の意味」2020/09/19

<https://www.goodspress.jp/reports/319442/>

「&GP モノ情報の総合ニュースサイト」の「体験ルポ」欄に4分割で掲載されたトラジャコーヒー生産地訪問記です。トアルコ ジャヤ社の取り組みも紹介されています。